

伊予和紙を用いた地域活性化手法の現状と課題

～四国中央市～

1150480 村上 結樹

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

本研究では四国中央市において伊予和紙を用いた地域活性化手法の現状と課題を明らかにした。四国中央市が「紙のまち」として呼ばれる背景について調査し、それをもとに伊予和紙がどのように確立してきたのかを明らかにした。

2. 背景

四国中央市は宝暦の時代から良質の紙を生産する町として栄え、今では紙製品の出荷額が全国で1位となり、名実ともに「紙のまち」といわれるまでに発展した。紙は私たちの日常において常に身の回りに存在している。紙には様々な種類のものがある。印刷や情報用紙、これらは主に新聞紙やコミック誌、ノート、切手、またお金などといったものから、袋用紙や包み紙、封筒などの包装用紙。ティッシュペーパーやトイレットペーパー、紙タオルなどの衛生用紙。書道半紙やフィルターなどの雑種紙。さらに、段ボールやパルプ芯などの段ボール原紙。絵葉書や、石鹸・薬品等の高級化粧箱に使われる紙器用板紙。建材用の防水原紙や、セロファンやテープ等の巻き芯など、その他の板紙があげられる。このように紙が私たちの生活において必要不可欠なものであることがわかる。しかし近年、紙媒体に対し、電子媒体と呼ばれるものが普及してきている。これらは、紙媒体とは違い、場所を取らず、持ち運びがしやすい、また上書きや加工がしやすいなどの利点があり、今後の紙産業に影響が及ぶことが危惧されている。そのなかで紙産業とともに成長・発展してきたといえる四国中央市は今後どのように生き残っていくのか、という点に視点を置いて進めていく。伝統産業である「伊予和紙」を製造している企業は、現在では四国中央市には4軒（平成22年現在）のみとなっている。和紙は需要を洋紙に取られ、衰退産業といわれ続け、消費は年々減少している。全国的にも事業所数の減少や従業員数の減少など市場は急速に減少してきている。原因として少子高齢化、ICT化の進展など印刷・情報紙分野の落ち込みが目立つ。加えて、労働生産性が低く、比例して賃金も低いため、後継者不足も深刻となっている。

これは四国中央市にも共通していえることである。またリーマンショック後に日本の紙・板紙の需要は大幅に落ち込みそのまま反動することなく推移している。

伊予和紙をつかった地域活性化手法の現状と課題を明らかにすることで、地域の伝統文化・資源を用いた活性化に対する検討ができると考えられる。



図1 紙・板紙の内需

(<http://www.jpa.gr.jp/states/paper/index.html#topic01>)
より引用：最終閲覧日：2015年2月13日)

3. 目的

本研究では、伊予和紙がどのように確立してきたのかということを、伊予和紙の歴史と概要をもとに明らかにしていく。また、四国中央市が「紙のまち」として更に活性化していく手段を明らかにしていく。

4. 研究方法

本研究ではまず四国中央市の「紙のまち」としての現状について調査し、課題と論点を抽出した。次に「紙のまち」の根本である伊予和紙について把握し、現在の「紙のまち」へ発展していった手法を明らかにしていく。

5. 結果

・和紙概要

和紙というのは日本特有の紙で、明治初めに欧米から伝わってきた洋紙に対する名称であり、主に楮、三桮、雁皮を原料としている。唐や諸外国の文化が取り入れられ、奈良町時代に中国から伝わり日本で技法が改良され流し漉き製法が確立された。薄く透き通るような繊維の流れが光に映え柔らかで粘りが強いのが特性である。

表 1 和紙と洋紙の比較

	和紙	洋紙
主な原料	楮 雁皮 三桮	広葉樹 針葉樹
強度	強い 繊維が太く長い	やや弱い 和紙に比べ繊維が細く短い
保存性	高い 紙を弱くする成分（リグニン）が少ない * 千年以上保存	低い 紙の劣化を進める成分が含まれている 変色や変質が起こりやすい
生産性 原価	原料が限られている 生産性は低い 高価	機械で大量生産可能 生産性は高い 安価

和紙は世界中の文化財の修復にも使われる。また保存性の高さや強度などの特性から日本画用紙や木版画洋紙等の用途を確立してきている。

和紙は古来より書物として伝来してきた。紙の需要が高まったのは江戸時代で、全国各地で和紙の生産が行われるようになった。また明治に入ると欧米から洋紙が輸入されるようになり、和紙の衰退がみられた。原因としては洋紙に比べて生産効率の悪さが挙げられる。しかしながら和紙には独特の特徴がある。薄くて強靱であること、なにより風合いが美しいことである。伊予和紙は、伊予の名の通り、愛媛でつくられた和紙のことである。

・四国中央市 概要

四国中央市は 2004 年 4 月に旧・川之江市、伊予三島市、宇摩郡土居町、宇摩郡新宮村の 4 つが合併して発足した。人口は 91,199 人（平成 26 年 9 月 30 日現在）、面積は 42057 km²。愛媛県の東端部に位置し、香川県、徳島県、高知県の 3 県に接している。これにより高速道路が交差するエクスハイウエーの中心となっている。瀬戸内海に面しているため、穏やかで温暖な気候であるが、北に鏝灘があり、南に法皇山脈という地形により日本海側気候の特徴ももっている。

（参考：四国中央市公式ホームページ）



図 2 四国中央市地図

四国中央市の年間平均気温は 16.6℃、年間降水量は 1,3741 mm、年間日商時間は 1,780.9 時間、工業製品出荷額等 60,461 千万、小売・卸売商品販売額 23,413 千万である。

工業製品のなかでも、製紙・紙加工業が最も盛んで全国でも上位の生産量を誇っている。紙製品の工業製造品出荷額が全国 1 位である。

表 2 紙のまちランキング（平成 24 年時点）

順位	市町村名	製造品出荷額等 (万円)	粗付加価値額 (万円)
1	四国中央市	48,652,054	17,428,609
2	富士市	39,318,554	13,472,021
3	新潟市東区	14,059,561	5,783,664
4	苫小牧市	13,286,736	4,820,606
5	春日井市	11,997,972	3,467,155

四国中央市は全国の市町村別の紙のまちランキングで 9 年連続 1 位という実績がある。愛媛県における産業別従事者の割合では第一次産業が 8.3%、第二次産業が 24.5%、第三次産業が 67.2%であるのに対して四国中央市は第一次産業が

4.8%、第二次産業が 39.8%、第三次産業が 55.4%と製紙・紙加工業の含まれる第二次産業の割合が高いことがわかる。

・伊予和紙 成り立ち

伊予和紙は宝暦（1751-1763 年）にはじまる。これは和紙の産地としては遅い。もとは農家の人々が副業としてはじめてのものであり、後に手漉き専業へと移っていったとされている。明治 30 年代から大正 2 年が最盛期であり、宇摩地方全域で約 765 戸（川之江で 350 戸）あった。昭和に入り機械抄製紙が増加し、それに伴い川之江で 14 戸、新宮村に 1 戸まで減少した。また、第二次世界大戦で使用された風船爆弾の原紙を抄くなど技術は高く評価されている。現在では書道半紙を中心に技術継承されている。

後発の地であるにも関わらず四国中央市は今もなお、「紙のまち」としていられるのか。四国中央市は銅山川流域で良質な水が豊富にあり、また自生の楮があったことにより、紙を漉き始めたといわれている、が裏付ける資料はない。昭和 29 年に銅山川疎水事業が行われ、製紙業に必要な不可欠な大量の工業用水が確保され、製紙業は大きく発展していった。和紙作りが盛んになり、四国中央市には手漉きを行う家が増えていった。今日の四国中央市が「紙のまち」と呼ばれている主な理由としては、表 2 にあるように製紙業における製造品の出荷額が全国で 1 位を誇っているからといえる。しかしながらこの製紙業で扱っているのは洋紙が大半である。

・近隣地域の和紙（現状・取組）

土佐和紙（高知県）、阿波和紙（徳島県）の 2 つはどちらも千年以上の歴史をもっている。また、1976 年に国の伝統工芸品に指定されており、それぞれの県の産物であるといえる。しかし、これら 2 つも伊予和紙同様、洋紙の波や、電子媒体普及による紙産業衰退の影響を受けているといえる。そこで、それぞれが地域活性へと取り組んでいることについて調査した。まずは土佐和紙。展示会や手漉き体験などが実施されているなかで、注目すべきは、「土佐和紙プロダクト」と呼ばれる取り組みである。デザイン事務所と活版印刷工房が共同で立ち上げたプロジェクトだ。土佐和紙を日常的に使えるように文房具を中心にファッションや玩具などの「使える和紙」を展示し、そこから商品化していくものである。次に阿波和紙の取り組みのなかで注目すべきは、オフセット印刷やインクジェット印刷の出来る和紙の製造、インテリア用和紙の開発など、現代のライフスタイルに合った和紙の提案を行って

いることだ。これらから、歴史ある和紙の良さを残しながら、いかに現代に需要のあるものを作るか、ということが今後の和紙産業で重要になってくる、ということがいえるだろう。

・四国中央市での伊予和紙の普及

伊予和紙が現在の四国中央市で普及した背景にはいくつかの条件と功労者が存在する。もとは大洲に越前和紙の技術が伝播したことからはじまる。しかしながら大洲藩は内子に「紙役所」を設置し、専売事業を行っていた。廃藩置県によりこれらが廃止され、宇摩郡（現在の四国中央市地方）でも手漉きはじまった。宇摩郡地方は天災が多く特に江戸時代には 2 年に 1 回のペースで天災や災害が起きている。藩の保護や奨励を受けていた地方の手漉きが廃藩置県を境に減少したとと比べれば、保護や奨励なしに和紙の産地として育てあげた先人の苦労や努力は計り知れない。この先人に視点を置くことで地域活性化ということを考えてみる。

上分村の薦田篤平という人物は農家の副業として農閑期に紙を漉くことで有利性があり、物流を利用して紙を作れば成功するだろうと、人々に説いた。これにより、農家が次々と紙を漉き始め、普及していったといえる。また、最初の製品が不評に終わると、紙の産地である越前や美濃の技術職人から学び、品質を改良し再販した。これが後に宇摩郡が紙の産地として知られるきっかけになった出来事である。薦田篤平氏は様々な方法で技術の習得を行い、繊維蒸解に苛性ソーダを用いるなどして品質向上を果たした。紙漉き業が盛んになるとともに原料不足が起き、



図 3 篠原朔太郎氏が漉いた紙

これらを解消するために三島村の石川高雄氏は鳥取県から直接宇摩郡に原料を仕入れることのできるルートを確立した。

販売においては三島村の住治平氏、石崎九真氏などが端は北海道まで足を運び製品の宣伝、品質改良のための情報収集へと駆け回った。結果として、宇摩地方の和紙の出荷量の増加となった。これが伊予和紙の産地としての宇摩郡の成り立ちである。

・手漉きから機械製紙への転換

宇摩地方における機械製紙への転換に大きく関わったのは



篠原朔太郎翁である。川之江町井地の紙漉きを家業としている家に生まれた。少年時代に紙漉きに興味をもち、27

歳頃に薦田篤平氏が

経営している製紙場に入り、薦田氏と共に研究開発を行った。また、印刷局抄紙部伝習生として研修を行っている際に洋紙の製造機械に触れることとなり、和紙の製造に生かせないかと考えた。これにより、全国で初となる叩解機を発明した。改良を重ね、現在でも手漉き和紙で使われているビーターを完成させた。これに続き、廻回転式三角缶の紙乾燥機も発明した。篠原朔太郎氏の発明により、画期的な機械漉きへと発展していった。昭和に入り、機械製紙業へと進み、三島、川之江は機械漉製紙の産地の座を確立していった。機械製紙へ業へと発展していく中で、コストや効率性などから和紙から洋紙への転換が起きたと考えられる。

・伊予和紙を用いた地域活性化の方向性

四国中央市は年間を通して、様々な取り組みを行っている。紙のまち資料館にて手漉き体験や和紙関連についての様々な講座の開催。かみまつりにて紙製品の販売や、紙を使った作品の紹介、展示。書道パフォーマンス甲子園の主催や他の地域の共同での企画展。また、ショッピングモールや小学校へ出張して和紙についての講座や手漉き体験の促進などを行っている。

伊予和紙における問題点としては、表1からわかるように和紙のほうが洋紙よりもコストがかかること、和紙は生産効率が悪く、現代の社会においては洋紙の需要が高いという点が挙げられる。これにより、伊予和紙を漉く業者の減少や衰退が起きてしまっている。

その中で伊予和紙が今後も生き残っていくために必要な点がいくつかある。和紙と洋紙との共生。他の和紙産地との差別化。伊予和紙のさらなるブランドの確立。具体的には伊予和紙を用いた商品の開発やさらなる品質の向上である。土佐和紙や阿波和紙の取り組みにあるような、現代への適応として、和紙をもっと身近なものにすること、和紙の用途を増やすことなど、和紙の多様化を推進していくべきであると考えられる。また、学校教育に伊予和紙製造の技術体験などを織り込

み、幼少期から自分のまちを支えている産業に触れる機会を作るべきだ。これにより若年層の和紙への関心が高まり、後継者育成へと繋がるだろう。他にも地域への伊予和紙文化・歴史の還元によって後継者不足への対策を行うなど、市全体での意識改革が必要になってくると考える。

6. まとめ

現在、四国中央市は「紙のまち」として全国的に有名となったといえる。結果からわかることとして1つの地域が活性化していく背景には様々な内部的要因や外部的要因が関係している。伊予和紙が地域に定着し、地域の産業を担うようになったのは、紙漉きを行うために必要な豊富な水と原料（つまり、銅山川の袂に位置し、山に囲まれていることで自生の楮）があったということ、廃藩置県により制度が廃止され自由に紙漉きを行えるという環境に恵まれていたこと、紙漉きに目を向け、力を注いだ先人たちが存在したことなどがあげられる。また、既存の技術に加えて新たな改良と新しい機械の発明。いわゆる技術革新を行ったことがあげられる。紙を漉くというメリットが宇摩地方にあり、この地域性にあった産業であったことが地域活性化につながったといえる。しかしながら現在伊予和紙は洋紙製造に押され、衰退の一途を辿ってしまっている、という現状だ。昔ながらの手漉き業者は2社まで減少している。伝統産業全体にもいえる後継者不足が伊予和紙でも起こっている。これらを解消するために、学校教育への積極的な導入や更なるイベントの開催などにおいて市全体での意識改革が必要である。

7. 課題

本研究における課題としては、今なお手漉きで伊予和紙を漉いている企業の実態、現状調査を行い、和紙と洋紙の製造における具体的な数値での生産効率の比較や、四国中央市に住む人の伊予和紙への思いなども明らかにしていく必要があると考える。

参考・引用文献 URL 等

書籍：紙のふるさと 紙を知ろう

日本製紙連合会 統計資料

ウィキペディア

ヒアリング協力者：

紙のまち資料館運営協議会局長 山内英政様

<http://www.awagami.or.jp/technology/01/index.html>

<http://tosawashi-products.com/>